

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

393
677

道
徳
の
源
流

始





道
後
の
温
泉



はしがき

道後温泉は歴史の古きこゝに於て日本一の温泉であつて、そして泉質の美なる建築の壯麗なるこゝに於ても亦、日本有数の温泉である。

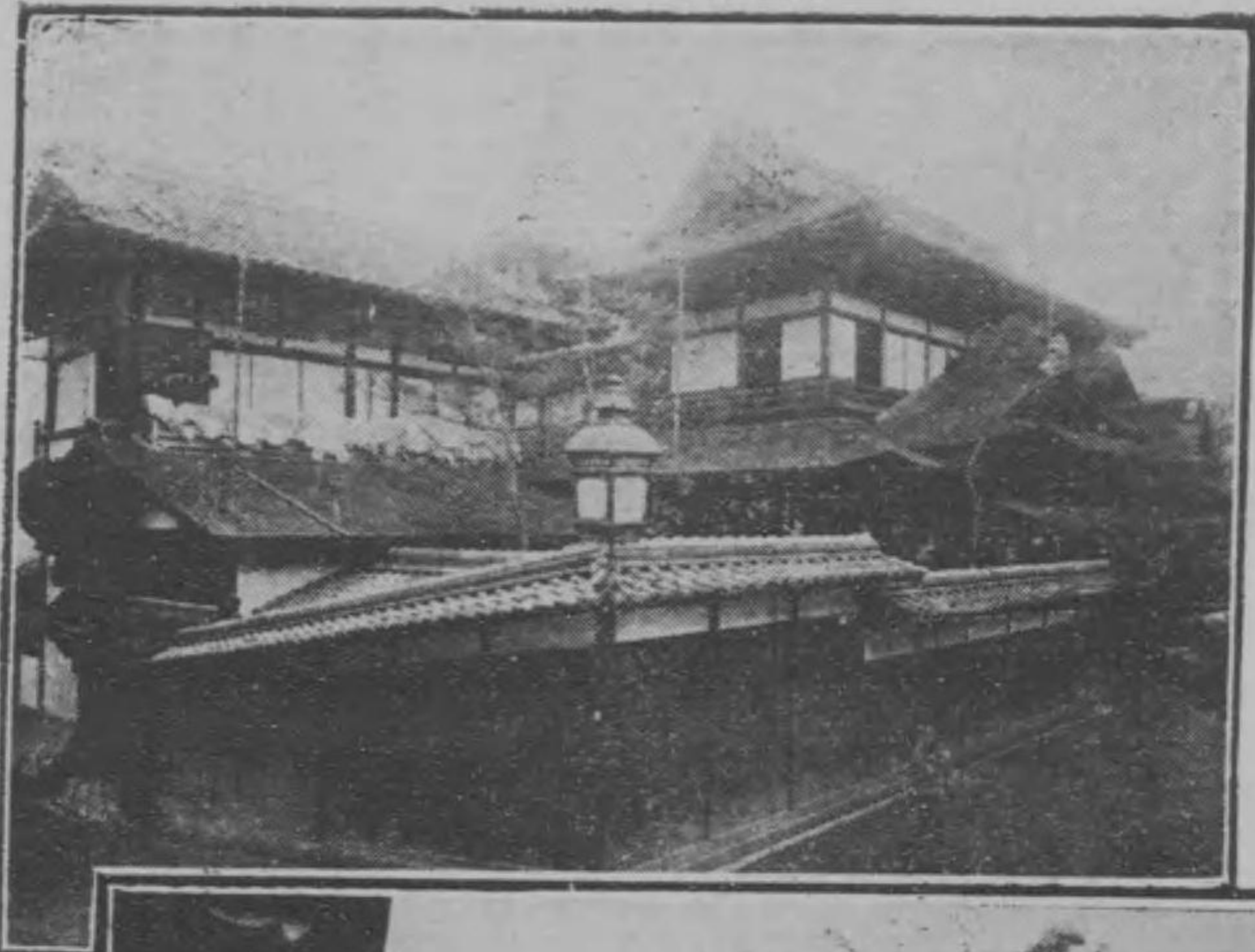
（文明の進歩と交通機關の發達とは、歴史的に著名な道後温泉をしてヨリ一層現實的に著名ならしめて、道後の温泉を慕ふて來る浴客は年一年増加し、過去の儘の設備を以てしては到底收容し切れない程、道後温泉は繁昌してゐるのである。この年々増加する浴客を完全に收容して、そして其の浴客を満足せしめるために道後温泉では、浴室増築の計畫を立て、先づ西湯を新設し、更らに養生湯の根本的大改築を行ふた。そして残るこゝろの家族湯の新築とドンコ堀の新温泉も、近く工事に着手するこゝになつてゐる。

この『道後の温泉』は養生湯の落成を記念として、道後温泉の温泉を圍繞せる其の周圍を紹介すべく編纂したものである。従つて歴史の考證や其の他の學術的研究などに重きをおかず、つゝめて平凡に道後温泉の案内書たらしむべく記述したものであるこゝを、まづ以て讀者諸君にこゝわつて置く。

大正十三年の初夏

編者識す





(下)湯西 (中)湯生養 (上)湯の神と湯の霊

次目『泉温の後道』

道後温泉三柱の神	一
日本一の稱ある其の建築	三
光榮の歴史に輝く道後温泉	五
美しい湯の偉大なる力	八
交通至便の道後温泉	一〇
道後の町と其の設備	三
伊豫の首都松山	六
詩の國——繪の國	六

道後附近の勝地	二四
道後附近の神社佛閣	三〇
道後の名物と土産物	四〇
伊豫節の名所めぐり	四二
附 録	
道後湯之町の町勢一斑	
道後温泉の分拆試験表	

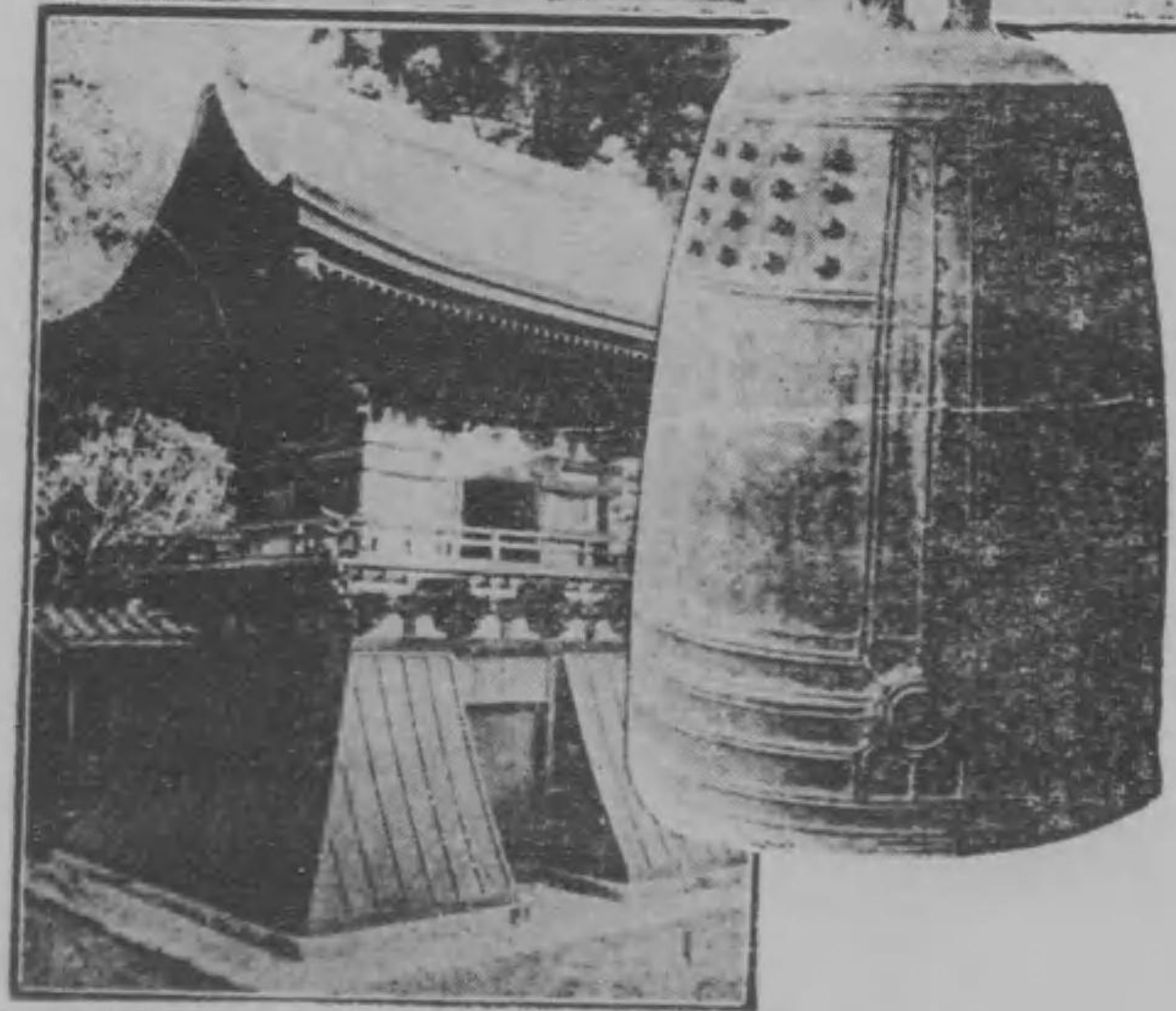




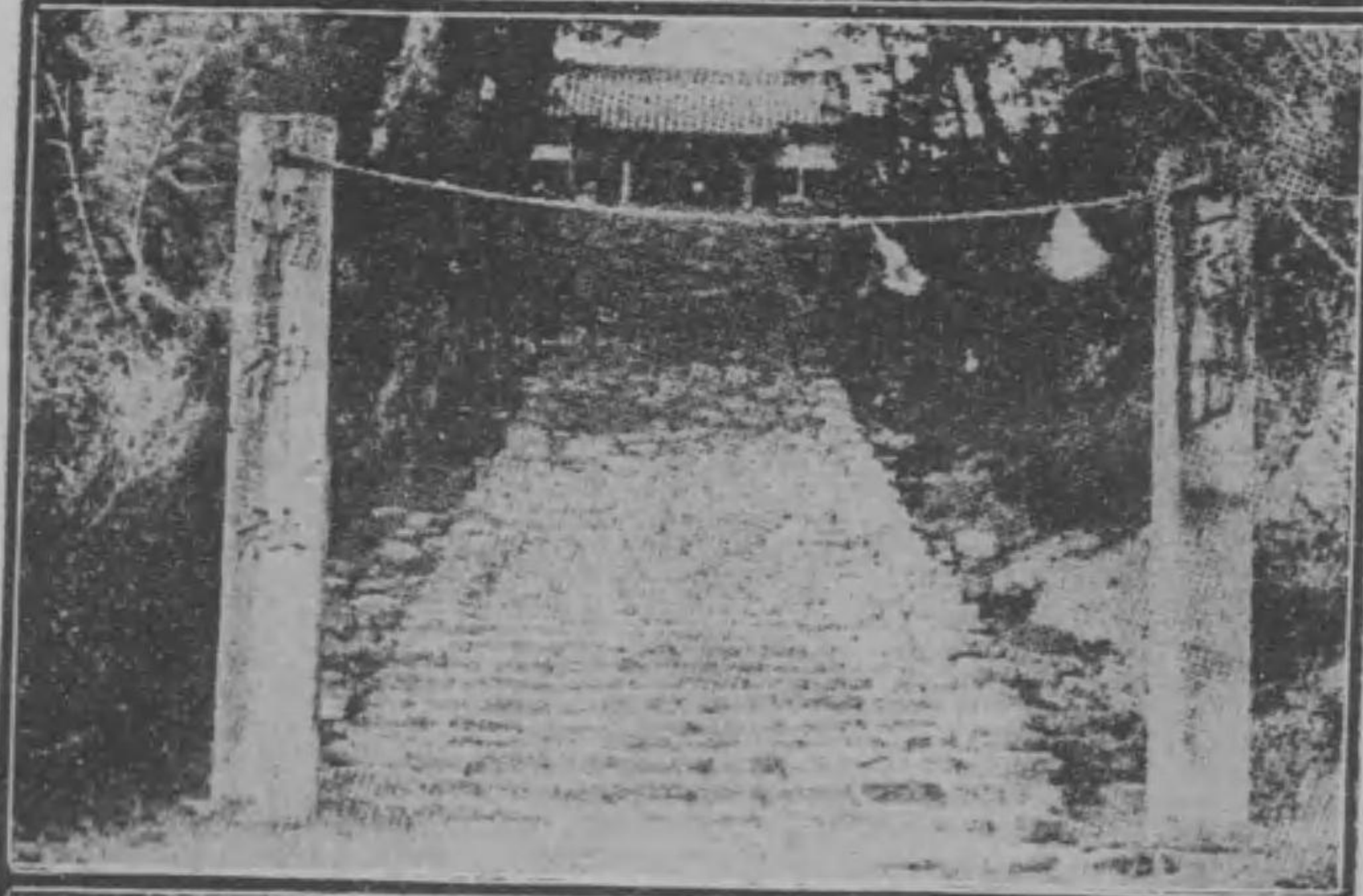
(下)釜湯の時舊 (三二中)園公後道 (上)城山松



(下)前殿神同 (中)望遠同 (上)社神波爾佐伊



(下)鐘と樓鐘同 (中)門樓同 (上)堂本寺手石



(下)町枝々松 (中)道詣參同 (上)社神湯

393-677

温泉と二柱の神

道後の温泉

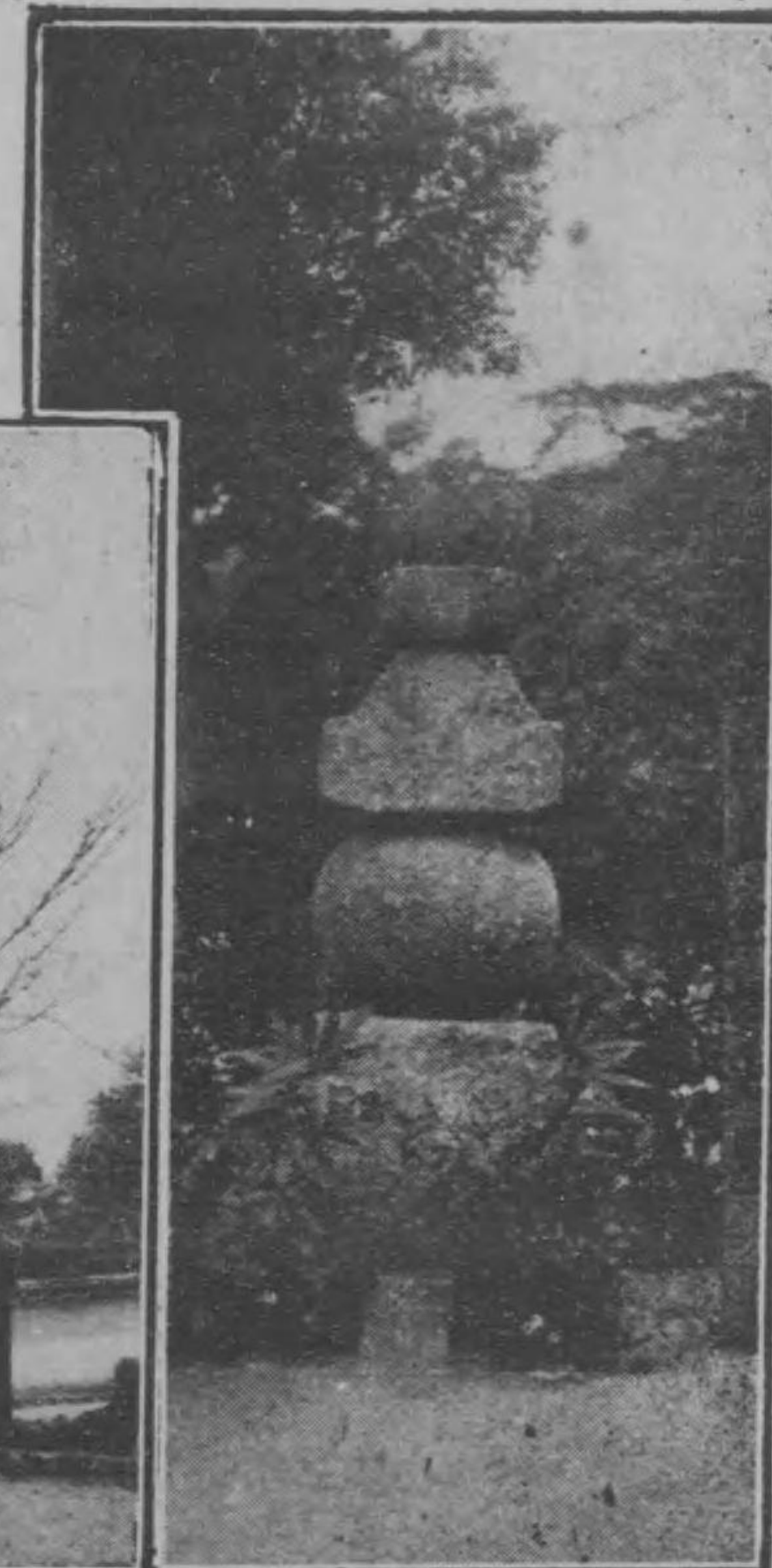
黒風樓主人

道後温泉と二柱の神

伊豫は湯の國、湯は道後、神代ながらの靈の石、サ、靈の湯、神の湯、エー——養生湯
ミ鎗錆びの替唄に唄つてある通り道後の温泉は、神代ながらの靈泉として、歴史的に、有名であれば神話的
の傳説にも富んでゐる。

地神氏の代に、大己貴命と小彦名命の二柱の神か、心を一にし力を協して國家を經營すべく、二手に岐れ
て普く日本全土を歴遊あそばされた。小彦名命は非常に慈悲深い神であつたから、人間が病に罹つて苦しん
でゐるのを見るに、藥草をこつて服ませたり、また獸類や毒虫などに咬まれて苦しんでゐる者には、呪文の

..... (1)



(下)寺殿寶 (中)櫻日六十 (上)墓の信重立足

法を教わて其の苦を救ふてやつたりした。

それに反して大己貴命は自から劍をこつて、他を制服するこいふ猛勇一片の神であつたから、人々これを怖れて只管その怒に觸れざらんこゝを、これ事こしてゐた。

こゝろが此の二柱の神が各國を經巡つて伊豫に來て、道後の土地でバツタリ出會ひ給ふたが、小彦名命は蒼生を憐み慈しみ給ふので、歸服して従ふ者も尠くなかつたに反して、大己貴命には怖れて誰も近づくものがない。此のさまを見て大己貴命は初めて自分が從來こり來つた方針が誤つてゐて、世の中は決して威武一片で治まるものでなく、仁と愛こそが武力以上に力のあるものであるこゝを悟るこ同時に、慚愧悔恨の情迫つて其處に卒倒し、生氣を喪つて了つた。

それを見た小影名命は大に驚いて、直に其處に湧き出た温泉を汲み取り大己貴命の體に浴せしめたこゝろが、不思議にも大己貴命は呼吸を吹き返してバチリこ眼を見開き、一首の歌を詠じて稍や小時やすらう

た後ち、勢び猛く跳ね起きさま側にあつた石を踏んで立ち給ふたこいふこゝろである。

その大己貴命が踏んで起ち上つたこいふ石は、靈の石と稱して今も尙、道後温泉の附近に保存されてゐるこいふほご道後温泉は、古代から靈泉として名を知られてゐる。いでや之れより其の道後温泉の、過去こ現在をこを紹介しやう。

日本一の稱ある其建築

日本は伊太利と並び稱せられる世界でも有名な地震國といはれてゐるだけ、夫れだけ出来るこゝろに温泉が湧出してゐる。著名なものこみ舉げて伊香保、熱海、箱根、城崎、山中、大聖寺、有馬、別府と數へ切れぬほご澤山ある。けれど其の多くは山間か若しくは海濱に偏して、地の利を得てゐなかつたり、或は又その温泉が熱きに過ぎたり冷きに失したりして、湯口へ其の儘こび込んでアゝ好い心こちだこ、肌に快きも

のは甚だ乏しい。

然るに道後温泉は、伊豫の首都松山市に接して東北僅に十町足らず、道後山の麓に沿ふて出雲岡を南に、鷺谷を北に控へ、た道後湯之町の中央にあつて、交通も至便なれば風光にも富んでゐる。のみならず其の湧泉の清浄にして、色もなければ濁りもなく、美しく澄み切つてイヤな臭氣もない。しかもラヂウム含有量の多いことは、日本第一の稱があり、醫治的効用に富んでゐることも、分拆の結果によつて學者が明かに證明してゐる。

日本一の温泉は道後温泉

殊に其の建築の壯麗なことに於ては、恐らく日本の温泉中この道後の右に出るものはあるまい。靈の湯(男女二室)神の湯(男女三室)養生湯(男女二室)西湯(男女二室)普通湯(男女二室)新湯(男女二室)いづれも二階もしくは三階建の堂々たる純日本式建築で、輪奐の美を設備の完全なことは確に日本一である。尙この外又新殿(御湯殿)を稱する皇族でなければ入ることを許さぬ特種の湯も、松湯(男女二室)といふ無料

の湯がある。

道後温泉では尙この外に高等湯と家族湯の二つを増築する計畫で、近く工事に着手することになつてゐるが、浴槽はいづれも花崗石で作り、玉のやうな温泉が滾々として溢れてゐる

光榮の歴史に輝く道後温泉

温泉としての最も古い歴史を有し、日本有数の温泉として最も其の名の著しい道後温泉は、そもや何時のころから湧き出したものであらうか。記録の傳ふるところによるに、未だ人皇氏に至らぬ以前、地神氏の代に既に業に滾々として湧き出してゐたのらしい。それは小彦命と大己貴命の傳説によつても、推知すること出来るのである。

されば人皇時代になつてからも代々の帝が、しばしば此の地に行幸遊ばされて、温泉に御入浴あそばされ

たこは歴史が明かに説明してゐる。

八皇第七代の孝靈天皇が後の細媛と共に行幸あらせ給ふたのが初まりで、第十二代の景行天皇、又後の八坂入媛と御同列で行幸御入湯になつてゐる。それから第十四代の仲哀天皇や後の神功皇后や、第三十四代の舒明天皇、その後の天豐財重日足姫、第三十七代の齋明天皇、第三十八代の天智天皇、第四十代の天武天皇なども行幸あらせられて、温泉を賞でさせられた。

殊に八皇第三十三代推古天皇の四年十月、聖德太子が葛城臣や高麗の高僧惠聰法師などを随へて行啓になり、湯之岡に碑を建て給ふて記念せしめられたといふことは、古書に明かに記されてゐる。斯の如くしばしば天皇、皇后、皇太子などの幸啓を迎へ奉た道後温泉は、従つて日本全土に其の名を知られ、二名島鬘比賣の國の温泉といへば、日本一の靈泉として其ころから既に業に普く世に知られてゐたのである。

けれども、その後は打續く世の變亂に時の帝の駕を迎へ奉ることもなかつたが、明治維新の革命と共に泰

西の文明が輸入されて、交通運輸の機關が進歩するに従ひ、道後温泉の名は更らに大に知られて全国各地から道後の湯を慕ふて來り遊ぶもの多く、殊に皇室の古き歴史は復活されて、明治三十六年には今上陛下が東宮として行啓あそばされ、又新殿に御入浴の上、道後公園の湯月ヶ岡に御休憩、記念の松を御手植に相成つた、その御手植の松は年と共に茂り繁つて、亭々として常盤の色を呈してゐる。

それから以後、明治三十九年には閑院宮殿下も駕を任せさせられ、有栖川大宮殿下をはじめ、小松宮、伏見宮、有栖川若宮、久邇宮各殿下も御入湯になり、近くは大正十一年十一月、攝政宮殿下には久邇宮若宮殿下その他の供奉員と共に行啓あそばされて道後公園に御少憩、記念の御手植も遊ばされたのである。

されば道後温泉の名は益々世に知られて故伊藤公をはじめ松方公や、土方伯、芳川伯その他朝野の貴顯紳士は、來遊の機會ある毎に道後に宿を定めて靈泉を浴し、そして身心を休めたのであつた。

斯の如く道後温泉が歴史的に有名であつて、高貴の御來遊を迎へ奉つてゐるのは畢竟道後温泉の、泉質が

美しいのと同じ時に地方の風光が明媚であつて景勝に富み、四時の遊樂に適するからである

美しい湯の偉大な力

無色透明な道後の温泉に浸つて、和らかで滑らかな湯に肌を抱かせること、何ともいへぬ快さを感じる。それは熱からや寒からぬ湯の温度が人の身體に適すること、その湯の中に含まれてゐる化學的性分が微妙な作用をなして、人體に一種の快感を覺へしめるからである。其の快感が應て温泉の醫治的効用として、化學的に證明されるのである。

道後温泉に有含せるラヂウムエマナチオンの量が、他の温泉のソレに比して甚だ優秀であることは温泉學者の證明するところであり、ラヂウムの醫治的効力の偉大なことも世人の熟知せるところであるが、道後温泉の化學的分拆の結果による醫治的効能を擧げて見るに、内服用にしても外用にしても其の範圍は頗る

廣いのである。

むかし此の地方に大地震があつて、温泉が埋没して其の所在が分らなかつた。一体どこが源泉であるか何處から温泉が湧いてゐたのであるか、全く分らなくなつたので道後の民は、血眼になつて探し求めたけれども何うしても分らない。最早や此地から温泉が消へ去つたのかと落膽して、ほんやり山の麓を眺めてゐるに、或る時、脛を傷つけた一羽の鷺が溪間の流れに下り、其の傷ついた脛を浸してゐる。最初のうちは鷺が溪間に下りてゐるのみ思つて別だん氣にも止めなかつたが、夫れが毎日々々同じ時刻に同じ鷺が下りて來るのて不思議に思ひ、よく注意してゐるに其のサギは數日の後ちヌネの傷が全く癒れて元氣よく飛び去つた。オヤサギの傷が癒つたこと人々不審がり其の溪水に手を入れるに温味がある。さては此處が源泉かと大に喜んで附近を掘り返へすに、案に違はず温い湯が溢々として湧き出したので此地をさぎ谷と名づけ、今も尙道後名所の一として残つてゐる。道後の温泉をさぎ湯と呼ぶのもこれがためである。

温泉の力はさぎのすねの傷さへ癒した。それほど靈泉であるもの、人の身體に効能のないといふ筈はない然り道後の温泉は多くの醫治的効用を有してゐる。専門家の分拆試験の結果によること

慢性痲瘋質斯、皮膚病、貧血症、慢性胃腸病、慢性胸膜炎、肋膜炎、心臟病、神經衰弱症、肺病、氣管支加答兒、生殖器病、腦病、慢性腎臟炎、腹膜炎、歇私的里、下痢症、下腹充血、肝臟充血、萎黃病、肺炎、痔疾、腺病、梅毒諸症、子宮病、便秘

等ざつここれだけの病氣に對して効能をもつてゐるが、中にも痲瘋質斯皮膚病婦人の生殖器病には、驚くばかりの効顯があるのみならず、病後の衰弱なきには大によいといふことである

交通至便の道後温泉

世界の海上公園といはれる瀬戸内海の、その波穏かな多島海の伊豫沿岸、嵯洋三齋灘この境目にあたる伊

豫小富士を腹に抱へて、眞野の長者の建立にかゝる靈場太山寺山を背に負ふた高瀨の港。

中央伊豫の要港、松山の玄關口として三百年來、松山藩水軍の根據地となつてゐた三津瀨の港。その三津瀨高瀨は關西有數の海水浴場として、設備の完全なことによつて名の高い梅津寺濱をさし挟んで、相並んだ中豫の港。

その高瀨から船を捨てても三津瀨から上陸しても、道後は僅に二里足らず、汽車と電車が通じてゐて、十分あまりで道後の町に着くことが出来る。

大阪商船や宇和島運輸の定期船、大阪宿毛線、大阪細島線、大阪別府線、大阪門司線なき總て高瀨に寄港して、上り下りとも毎日數回出帆する。おかげで大阪と九州方面との交通は、極めて便利である。

松山と廣島、松山と尾ノ道との中國航路は、三津、高瀨を起點として毎日二回乃至三回往復する。殊に九州行きのみちとして大島汽船は三津、高瀨と山口縣柳井津港と大島間を、毎日缺がさず航海してゐる。こ

れ等の汽船は總て伊豫鐵道並に國有鐵道と、連絡輸送の契約をしてゐるので、道後の驛で切符を買へば東京大阪は勿論四國、中國、九州の果まで、一枚の切符で旅行の出来る便利がある。尙この他に伊豫の島々を縫ふて、廣島縣の倉橋島に行くものや、伊豫沿岸を航海する小型船などもあつて海上の交通は自由自在である。

四國鐵道豫讃線は既に高松から今治まで開通してゐる。これが松山まで通じるのは大正十四年であるけれど、松山今治間は定期自動車が頻繁に往復してゐるので、鐵道との連絡も不自由でない。松山から八幡濱、宇和島への鐵道も愈よ大正十三年度から着手せられる事になつてゐるから、茲五六年の後には四國循環鐵道も大部分開通して、陸上の交通も益々便利になる。

四地と本土との交通が、斯く便利になればなるに従ふて道後と全國との關係は愈よ密接になつて、道後の温泉は單に伊豫の湯でなく、日本の温泉であることの實が、發揮せられる譯である。

道後から松山までは僅に十町、朝の暗いうちから夜半まで電車が頻繁に往復してゐるので、道後に住んでゐても、松山に住んでゐるのと同じではない。

汽車や汽船の發着時間表は末尾に載せておく

道後の町とその設備

道後の街は温泉を圍繞して作られ、温泉によつて發展した街である、さればこそ湯の町と呼ぶのである。けれども行政區劃の上から見た道後湯之町は、大字道後、湯之町、石手、祝谷などに分れてゐる。山あれば田もあり街もあるといふ風に、四百三十町歩の面積と一千四十三の戸數と五千三百十六の人口とを有してゐるのである。が然し道後の街といへば即ち湯の町で、温泉場を中心にして作られた四百戸ほどの街である。屏風の如く線を展べた道後山の麓、冠山を取り巻いて作られた湯之町は、松山から來た電車の停留場を降

るこ直ぐ町の入口で、鯉や鮒が楽しげに泳いでゐる放生池の汀を北に上るこ、心もち爪先あがりになつた市街の両側には、道後温泉の名物「湯ざらしせん」や「湯桁飴」や「道後煎餅」や「湯ざらし團子」なき土産物屋が店を列べて客を呼んでゐる。その丁字路の突き當りが西湯であつて、西に折れるこ小學校に出るし、東に折れて突き當るこ靈の湯、神の湯、養生湯なきの温泉場である。

此の温泉場を圍繞して湯治客を迎へる三層樓、四層樓の旅館が軒を並べてゐるのである。道後は温泉場——湯治場であるだけ、旅館の設備は整つてゐて旅客に少しも不自由はさせない。

温泉場の前を北に折れるこ町役場があり、南に折れるこ冠山の頂きに祀れる湯神社の鳥居前に出る。その鳥居前を東へダラ／＼坂を上るこ松ヶ枝町の廓の入口で、時宗の開祖一遍上人の遺跡寶嚴寺は松ヶ枝町の奥の山腹にある。其處から南に進むこ八幡山の麓、伊佐爾波神社の鳥居前に出る。

玉の石名高い石手寺や螢の名所義安寺なきへ參詣するものは、ここから東南に道をこるのであるが、西

南に進めば湯月城趾に設けられた道後公園に出るのである。

小學校の前から四五町北西に進むこ、祝谷に關西第一の大グラウンドがある。此のグラウンドは野球、庭球、水泳その他各種の運動競技場として、最近設けられたものであつて、地勢の關係から冬の運動場として、理想的のものであるこいふこである。

道後の町はザツこ斯んな風に作られてゐる、此の湯之町には旅の客の鬱を晴すに相應しい料理屋もあれば藝妓もゐる。

道後には松ヶ枝町こいふ別世界もあれば、湯之町にも藝妓がゐる旅館での晚酌のお相手もする。松ヶ枝町は一廓をなしてゐて二十軒ほきの貸座敷が軒を列べ、不夜城の賑かさを見せてゐる。松ヶ枝町にも湯之町にも、常に五六十名宛の藝妓がゐる、湯治場らしい氣分を味はして呉れてゐる。

道後湯之町は温泉場としての設備に力を注いでゐるだけ、宿屋や料理屋なきも旅の客を迎へるに事缺がぬ

だけの設備は先づ整つてゐる。のみならず周圍に景勝の地が多くて遊覽にも適し、倦怠を覺へさせるやうな
ここは無いのであるが、夜の娛樂機關として劇場を建設したらさういつてゐるものもある。

伊豫の首都松山

道後松山は地理の上に於て相接してゐるばかりでなく、繼ての點に於て離るべからざる關係を有つて
ゐる。松山の名が天下に知らるれば道後の名も又天下に知られ、道後温泉が有名になればなるに従つて松山
も又名を知られるのであつて、松山道後——道後松山は二にして一といふべきである。

松山の市街は道後の町から十町ばかり西南に方つて、高く聳へた勝山城を取巻いて形作られた伊豫の首都
愛媛縣廳の所在地であつて、美しい城の在るころとして廣く名を知られてゐる。その美しい松山の市街は
今から三百餘年前、慶長の八年、彼の有名な賤ヶ嶽七本鎗の一人、加藤左馬之介嘉明が松前から移つて勝山

城を築いてから開かれたものであつて、三百年の茂り深き城山は松山市の中央に高く聳へ、三重の天守閣は
美しい色彩を松山に與へてゐる。

戸數一萬二千、人口六萬に餘り、汽車と電車が市街を取巻いてゐて高濱、郡中、森松、横河原、道後の各
方面に通じてゐる。殊に道後、松山間は、七分毎に双方から電車が出るので極めて便利がよい。

松山は愛媛縣の首都であるから縣廳は勿論、地方裁判所もあり刑務所もあり、税務署や郵便局などのある
のは云ふまでもなく、歩兵第二十二聯隊もあり松山高等學校もある。その他中央都市としての設備も總て備
はつてゐるのみならず、商業も可なり殷賑であれば、伊豫絣や綿練や竹細工や陶器類などの工業も盛んであ
る。

松山は美しいところ、よいところ、城山は固より松山を飾る大きな景物であつて、その頂から俯瞰すれば
道後平野は一瞬の下に集まる。蛇々長蛇の如き重信の清流や、五色の濱の松風、梅津寺の海水浴場、道後公

園なき附近の勝地は四季を通して遊子の眼を喜ばしめるに足るのである。この松山を圍繞した勝地は亦、道後温泉を中心とする湯治客をも慰めるのである。然れば松山には観光の遊子を迎へる準備を整ふて、殊に娛樂場の如きは却々盛んで新榮座、壽座、朝日座といふ三つの劇場もあれば有樂座、松竹座、敷島館、松山館、千代田館なき多數の活動寫眞常設館もある。

この多くの娛樂場は、總て電車の便のよいところに設けられてあるので、松山の娛樂機關であると同時に道後のための娛樂機關でもあるのであつて、早朝から夜半まで七分毎に發車する電車は、道後松山を全く一つに結びつけてゐるのである。

詩の國——繪の國

松山は詩の國である、繪の國である。従つて道後もまた詩の國であり、繪の國である。松山の詩には星の

岡があり五の森があり金龜城がある。松山の繪には柘堤があり城山があり五色の濱がある。道後の詩には温泉があり湯月城があり石手寺があり寶嚴寺がある。道後の繪には湧ヶ淵があり岩地があり公園がある。そして其の詩にも其の繪にも、皆それ／＼異つた趣きをもつてゐて、旅人の耳を樂しましめ、目を喜ばせるものがある。

然り松山や道後は、二名島壁比賣の國の往古から、愛媛縣伊豫國の今日に至るまで、數かぎりのない多くの歴史を織り出してゐれば、幽邃明媚な景勝にも富んでゐるのである。今それらの名所舊蹟を紹介するに先だち、詩歌に詠まれた道後をさつと見ることにしよう。

神さふる伊豫の湯桁のそのかみをおもへば遠き行幸なりけり

神さふるいよの湯桁のそれならで我老らくの數ぞしられぬ

飽田津の秋の御幸の古へも思ひいで湯にすめる月かけ

泉温の後道

影うつすいよの湯けたの数までやわきてさやけき十六夜の月
熱田津に船出せんこや雲晴る、伊豫の高根をまつのをむらん
伊豫の湯の湯桁はいくつひだり八つ右は九つ中は十六
いよの湯のみぎはに立てる玉の石これぞ神代のしるしなりける
玉の石たまちる影にくだかれて月も湯けたの数ぞうつもふ
いよの湯の下よりゆくの白糸や来る人たへぬものにぞありける
朝日さす千木のかたそぎ影をいで算ふ湯けたや敷まさるらん
夕日かけ八色の雲のいにしへを思ひいづもの岡のかみ垣
けさ見れば雪ふりしきぬ伊佐爾波日きよめいそぐな神のみやつこ
里人はいざこさそひて伊佐爾波のふみかへすらん年のくれきて

國の繪 國の詩

灌將炎液解危痾、踐石居然發詠歌、傳到而今渾似玉、千秋聖蹟不消磨
一浴便能治劇痾、奇功詠起寢哉歌、靈貯石園如玉、不知風霜雨露磨
湯築始傳神代中、稱名藉以記成功、何緣二字音相近、錯把泉宮作月宮
遙從神代關炎流、六帝頻傳風浴遊、昔日行宮人不識、可憐零落盡山邱
憶起湯岡太子碑、浴餘曳杖少流離、徘徊山色水光際、一々問人々不知
草花や露あたまかに温泉の流れ
山の上の涼しき神や夕詣り
戸開くれば温泉熱逃げ去る秋の雨
石手寺にまはれば春の日暮れたり
うそのやうな十六日櫻咲きにけり

子 子 虚 虚 子

規 規 子 子 規

温泉に入るや晝寝さめたる頼許り

虚

子

水草の花まだ白し秋の風

子

規

温泉の町に紅梅早き宿屋哉

同

岩堰の月見更がして道後の温泉

同

月

一の温泉に落合ふて月に誘はれぬ

同

一の温泉や只一人入る今朝の秋

同

朝寒の腰骨打たす温泉口哉

同

靈の湯へ冠山越す夜寒かな

同

蝙蝠や廓から温泉まで遍路宿

同

温泉の山に稀なる雪や松の内
春めくや櫻雲亭の一ト構へ

同 黙

禪

養生湯落成

摸擬店のテント傾き花の雨

同 黙

禪

山の上ば早苗祭りの大鼓かな

同

艦着くや又旗立ちし温泉場の冬

同

障子貼る二階三階やお中日

同

道後公園にて

温泉の太鼓鳴りけり花に灯がこもる

同 里

雪

温泉を出で、夜櫻見るに良き夜なか

同

道後附近の勝地

廣い意味でいふ松山は繪の國であり、詩の國、歌の國であるだけ、道後平野それ自体が勝地であり景勝である。けれども其の景勝を組織する要素の川も、森も、橋もか家もかいふ一つ一つに分けて見ても、夫れづ、独自の趣きをもつてゐるのであるから、道後附近の勝地をあらまし紹介しておかう。

八景八勝と十六谷

先づ順序として古くから道後の八景、八勝、十六谷として記録に残されてゐるものを挙げて見やう、但し此の中には既に名のみを存して實を失ふたものもある

道後八景 義安寺の螢、奥谷の鶯、圓滿寺の蛙、冠山の時鳥、御手洗川の水鶏、湯元の蜻蛉、古城濠の水鳥、宇佐田の雁、

道後の八勝 温泉樓上の觀月、振鷺閣の暮雪、雅溪の納涼、放生池の蓮花、鷺谷の晴嵐、公園の櫻花、石

手寺の晚鐘、拓川の垂輪。

道後の十六谷 石切谷、義盛寺谷、圓滿寺谷、本谷、柳谷、細見谷、鴉谷、法雲寺谷、櫻谷、鷺谷、立石谷、柿之木谷、大堂谷、大谷、奥谷、湯月谷。

さつと斯うである、此の八景もか八勝もかいふものは、道後温泉を中心にした狭い周圍から無理に選んだものである、必ずしも景勝と見るべからざるものもあり、殊に十六谷に至つては土地の者さへ知らぬ名が多いのであるから、今更ら詮索する必要もないが、しかも八景、八勝中には現在も尙天下の景勝として誇るに足るものもあるのである。

石手川の堤塘

松山を飾る美の大なるものに勝山城と石手川がある。石手川は川を流れる清例な水よりも、その瀬を登る鮎の味よりも、川の兩側を固める大堤塘の鬱蒼な茂りが、絶景といはれてゐる曾て太平洋講會の連中が彩管をのせて、關西各地に寫生旅行を試みた時、初夏の拓堤に來り初めて自然の美

しい技巧を見るこゝが出来たこゝ嘆賞したほゞである。その石手川は水源を湯山村水ヶ峠の溪流に發して道後
 を經、松山を南に流れて重信川に合し、伊豫郡に於て海に注ぐ十里に足らぬ流れではあるが、上流には水墜
 の瀧や湧ヶ淵や岩堰の勝もあり、殊に石手寺前附近から重信川と合する出合附近までの堤塘は、三百年の壽
 を重ねた老松古木が生ひ茂つて、林の中を往くやうに清爽な氣に充ちてゐる。その鬱蒼たる林の中央を清い
 清い水が流れてせせらきを立て、樹の間を縫ふて飛び交ふ鳥は、自由を歌ひ樂しむかのやうに囀つてゐる。
 その勝、その景、まことに自然の美の粹いふべきである。さればこそ松山市では此の拓堤の一部を、石手
 川公園として遊覽の士の便を圖つてゐるのである。

岩堰の遊園地

この石手川の上流、石手寺を去る數丁の東南方に岩堰の奇勝がある。河身全部
 が大理石のやうな美しい大岩石で出来てゐて、石手川を流れる水が此の岩の上を靜かに滑つて、岩に激し、
 堰の眞下の淵に落ちて岩壁にぶつ突かり、白泡を飛ばしてゐる眺めは確に一勝地たるを失はぬ。近時この岩

堰附近を切り開いて櫻樹や常盤木を植ゑつけ、休憩所をも新設して岩堰遊園を作るべく石手青年會や、道後
 貴賓會で力を注いでゐる。道後湯之町から僅に五六町に過ぎぬから、散策がてらの遊覽に便である。

湧ヶ淵

イワゼキの上流、湯山村宿野々の山間を流れる石手川の一奇勝で、兩岸から河床にかけて
 奇岩怪石突兀して聳々立ち、水は岩石にせかれて淵となり或は激して瀑となるなき、老樹鬱蒼たる裡に百
 雷の一時に落ちたやうな響を立て、流下する急流は目も眩むばかりである。昔、義安寺建立のとき湯の山か
 ら多くの柚木を此の川に流したところ、湧ヶ淵で悉く水底に巻き入れられ、其の木は遠く土佐の國に流れ出
 たさやら傳へられてゐて、渦を卷いて湛へてゐる淵の底には、大きな穴があつて何處かの遠方へ通じてゐる
 こいはれてゐた。また此の淵には古來大蛇が棲んでゐる里を荒し、民を悩ましてゐたのを湯山村食場の庄屋
 三好の祖先、長門守秀吉の長男藏人之助秀勝が、鐵砲で討ちこめたといふ物語も貽つてゐる。三好家には、今
 でも蛇骨が存してゐるこやらいふこである。

イワゼキの上流には伊豫鐵電の水源地や發電所もあり、其の下流には半藏淵といふ勝地もある。また湯山村の末の山間には高さ二十二間、幅四五間の水墜の瀧あり、石手川筋には探るべき景勝が多いのである。

道後公園

湯ノ町の南隅鴉溪に隣つて縣下第一の道後公園がある。道後公園は建武年間河野通治の築いた湯月城趾を伐り拓いて、明治十九年に縣營で公園としたものである。古城の趾である小山を中央にして美しく作られた園内には、四季折々の花樹が所せまきまでに茂つてゐて、中にか櫻樹の多いところは地方に類がなく盛春の美観は一通りでなく、松山の春を此所に集めたかと思はれるのである。建武以降の戰國時代に勇をふるうた河野家の名残は、今も尙園の内外を繞つてゐる外濠と内濠とに止めてゐて、當時の威武を偲ばせる。内濠に架けられた橋を渡つて城趾の頂に登ると、三方に平野が潤けて松山城下が一眸のまに集り、遠く伊豫の小富士を距て、中國地が、淡墨繪のやうに模糊として眺められる。園内には聚樂館、風詠館、櫻雲亭、小竹亭などの集合所や休憩所があつて料理屋も營んでゐれば、まごころづくに小亭も點々設けられて

るて遊覽客のために席貸しもしてゐる。従つて春の花、夏の納涼、秋の月、冬の雪見と四時遊覽の客が絶へぬ

松山公園

美しい城の在る松山として知られた其の松山城址を、公園として開放してゐるのであるが、天主閣をはじめ櫓その他の建物の完全に保存せられてゐることは全國の舊城中にも稀である。三百年の線濃き城山の頂には櫻の老樹が生々々枝を張つてゐて花時の美しさは勿論、舊松山領内の殆んど大部分を俯瞰し得る其の展望は、また格別である。そして天主閣に陳列して一般の縦覽に供してゐる甲冑刀劍等の武器は、鑑賞に値する逸品が多い。

梅津寺海水浴場

夏の遊び場として松山附近には海水浴場が多い、少し遠いけれども郡中の五色濱には五色の石の色美しい海もあり、それに隣つて牛子ヶ原の松風清き新川海水浴場もあるが、休憩所その他の設備が完全に交通の便の整つてゐるのは何と云つても梅津寺海水浴場である。梅津寺は高瀬港と三津濱港の中間に在る遠淺の海で、伊豫鐵電會社が全力を擧げて經營に努めてゐるだけ、海水浴場としての設

備の完全なことは關西にも多く其の類がなく、夏期の三ヶ月は毎日數千の海水浴客によつて賑はうのである
道後停留場から電車に乗つて古町驛に出て汽車に乗り替へるこゝ、海水浴場前の梅津寺停車場に着く。

道後附近の神社佛閣

道後温泉が神代から滾々として湧出してゐる最も歴史の古い温泉であるだけ、神社佛閣もまた由緒のある歴史の古いものが多い。のみならず道後附近の神社や佛閣はまた孰れも勝地であり舊蹟であつて、旅人の感興を惹くものが多いのである。

伊佐爾波神社

道後の停留場を出て眞直に東へダラ／＼坂を登り、それを突き當るこゝ大きな石の鳥居がある。その大鳥居を潜つて高い石段を登りつめるこゝ縣社伊佐爾波神社(俗に道後八幡)の神殿がある
道後山の東南に突出した部分——伊佐爾波岡の老松古杉が生ひ茂つた、神寂びた中に鎮座まします伊佐爾波

神社は、應神天皇と仲哀天皇と神功皇后を祀れるものであつて、湯月城主河野家では道後七郡の守護神と崇め、加藤嘉明、蒲生氏郷なども同じく守護神として崇敬し、松平隠岐守(久松家)が松山城主となるに及んでも湊るこゝなく、殊に松平定長公は最も深く尊信して寛文七年飛彈の名匠に命じ、山城の石清水に倣ふて社殿を改築し、寶殿圍廊玉垣に至るまで悉く華麗な彫刻を施したものである。従つて所藏の寶物なども多く、中にも

四帝一后の宸翰、時鳥香爐、輪光琵琶、孫武子之卷三冊、寧宗皇帝額二枚、吉光の短刀、國光の短刀
などは著名のもので此の他書畫、樂器等數百點に上る。道後一圓並に松山市一部の氏神として、毎年十月六七兩日は大に賑はふ。

湯神社

伊豫の根の雪よりあけて伊豫の湯の煙よりこそ霞みそめけれ……こゝ古歌に詠はれた出雲國は冠山と稱して町の中央、温泉場の南に隣つた高さ十六間の小丘で、湯之町は此の冠山を圍繞して作られて

道後温泉

る。冬期籠から立ち昇る湯氣は恰も雲の出づるが如く見へるので、出雲岡と名づけたのだとやら、此の出雲岡の頂上に大己貴命と少彦名命を奉祀せる湯神社がある。道後温泉は大己貴命と小彦名命によつて發見せられたものであるが、この二神の恩澤を蒙むるこゝは洪大なりて蒙山と名づけたのが轉訛して冠山となつたのだともいふ。松や雜木が生ひ茂つた清寂な冠山は小公園式に手入れが出来てゐるから、夏の夕納涼などによいところ、毎年初春の初子祭には近郷近在からの參詣者が多く、町内も大に賑ふのである。尙素盞鳴尊と稻田姫命を祭神とする出雲岡神社や、遊行一遍上人の父別府七郎通廣の靈を祀るこいふ兒守社なども湯神社の附近に在る。

岩崎神社

道後公園内東南隅の丘上に、菖蒲池を真下に見て奇岩怪石禿兀として相重り、檜の樹立ちがこんもりと茂つた中にまつられてある小祠で、往古伊佐爾波神社が鎮座しましたところであるが、河野氏が湯月城を築くに當り道後山に移したので、舊趾に一小祠を營んだのが此の岩崎權現だもやら、なぜ

道後附近の神社佛閣

か花柳界方面の信仰が深いので夏の祭日には參詣人が多い。

石手寺

温泉から約五丁ばかり東の大字石手に石手寺がある、四國靈場第五十一番の札所で道後温泉と共に並び稱される名刹である。往古は虚空藏院安養寺と號し神龜五年に聖武天皇の勅願所として創營せられたもので、堂塔廓宇宏大にして六十六坊あつた由であるが、其の後兵燹又は雷火に焼かれて今は十一を殘すのみとなつてゐる本。尊の釋迦牟尼佛や脇侍の普賢、文珠を初め大師堂の弘法、藥師堂の藥師如來仁王門等は何れも運慶の作であり、觀音堂の十一面觀世音は行基の作である仁王門は塔其他と共に特別保護建造物となつてゐる。境内には姿見の池、不動石などがあり、寶物には太古の石劍、影向鏡、十八天の畫、國司の式目、足利家の教書、空海上人や一遍上人の筆蹟その他珍品が多い。尙山門のほごりに伊豫守源賴義の墓がある。この石手寺に玉の石と稱する一寸八分の小石が寶物として傳へられて、その石に不思議な物語が附隨してゐる。今は昔松山を距る南方二里あまりの荏原(現今の温泉郡荏原村)の郷に衛門三郎といふ富豪があつた、

此の衛門三郎性來大の吝嗇家て慳貪邪見、無闇に財寶を食つて他を苦しめ、神や佛をないがしろにして少しも信心といふことを知らなかつた、或る日この衛門三郎の軒に托鉢の僧が立つたが固より布施するやうな三郎でないから、散々悪口した上に僧の持った鐵鉢を引たくつて地上に投げつけた、ところが不思議にも其の鐵鉢が八ツに破れて、夫れから間もなく彼れの悍八人が次から次へに死んで了つたので、流石の彼れも發心悔悟し家を捨て身を忘れて四國巡拜に出た。そして幾回もなく四國を巡つてゐる中に天長八年、阿波國燒山寺の籠で病氣に罹り將に死んじする時、弘法大師が現はれて佛果を得さすべしと一寸八分の石に衛門三郎を刻みつけ其の石を彼れの手に握らせた。衛門三郎は其の石を確に握つて安らかに死んでから數年後、河野息利の子に生れた男子息方は、生れてから相當日數を経るも不思議に左の手を堅く握りしめて開かぬので石手寺(當時の安養寺)に祈願をこめ、漸く左の手が開いたが其の掌のうちに「衛門三郎」を刻んだ小石が現はれたので其の石を寺に納めた、それで寺號を石手寺と改めたのであるといふ。此の衛門三郎の物語は佛敎劇にも

仕組まれて有名である。尊榮師の歌に

名にしほふ石手の寺の石の玉くちずくずれぬしなるらん

寶嚴寺

道後松ヶ枝町の遊廓を通り抜けた奥谷の山麓に、縣下でも有數な時宗の古刹寶嚴寺がある

齋明天皇の勅願により天智天皇の四年伊豫の國司智乎宿稱守興が命を奉じて建立したもので住古は誓願院と稱してゐた。本尊阿彌陀如來は春日の作で時宗の開祖一遍上人は此の寺で誕生したといふので有名であるが一時殆んど衰滅に瀕してゐたのを一遍上人の父如佛が入寂した翌年、即ち弘長四年に河野上野介通繼と得能藏人介通秀とが相計つて再建し、十二子院をも併置したが子院は漸次衰滅して今はなく、子院林光庵に安置せし一遍上人自作の像(國寶)は現に本寺に在る。現今の松ヶ枝町は衆坊の迹とやらで開基以來實に一千二百五十八年(大正十三年迄)の星霜を経た古刹である。一遍上人は河野四郎通信の第三子別府通廣の三男で幼名を、松壽丸と呼んでゐたが十八歳の時、友人を殺して大に悔ひ剃髮して佛門に入り、西山の善惠上人に従

ふて修行を積み、大に得道して時宗といふ一派を問いた高僧であつて、相模の藤澤に本寺を定め此寺を根據として全國に布教し、正應二年八月五十一歳を一期として攝津の兵庫に逝く、上人遊行し稱し故郷の伊豫にも屢々巡錫して寶嚴寺に足を止めたこやらで、松ヶ枝町の入口に一遍上人の碑が建てられてある。北東南の三面山を繞らし松樹蒼鬱として青翠清る如く眺望佳し。

義安寺

道後の湯之町から東へ一丁あまり、昔から戒能谷の螢といへば螢の名所として『義安寺螢』の名で知られた義安寺は、天文八年河野彦四郎義安の建立したもので、本尊の薬師は行基の作であるといふ。本堂の後方に弘安四年蒙古征伐の役に従ひ出征して、筑紫の海で戦死した義安の祖父伯耆守通時を葬つた墓がある。

常信寺

星の影露に古りたるこの寺のむかし覺へて螢飛ぶかな
祝谷の大グラウンドの直ぐ真上にある舊松山藩主久松家の廟所で、松山の弘真院勝山寺を

移管したものである。境内に美事なる櫻樹多く花時には觀櫻の雅人て大に賑ふ。

圓滿寺

弘仁年間の草創で長さ一丈二尺餘といふ行基自作の座像地藏尊を本尊とする、往昔は寺内に巨大な梅樹が澤山あつて、梅の名所として知られてゐたが既に全く拓れ盡して、今は僅に其の佛を止めるのみ、けれご寺内の古池には松山城主久松定長が、山城の井手から取りよせて放つたといふ蛙が、今も尚傳つてゐる蛙の名所として知られてゐる。

龍穩寺

祝谷から御幸寺山の麓を廻つた山續き、御幸村の山越は寺院の多いこゝで名を知られてゐる。其山越に孝行櫻(十六日櫻)で名高い龍穩寺がある。龍穩寺の前身は天徳寺で天徳寺の前身は古く奈良朝に溯るべき舊刹であるけれど今は其の由來を知る、こゝが出来ぬが、延徳二年道後湯月の城主河野通宣が祝谷の地を相して天徳寺を建て曹洞宗の耆宿月湖契初禪師を開山とし、寺領三百石を寄附して菩提寺としたものであるけれど、通宣の子通直に嗣子がなかつたので家督相續のこゝから一族老臣、隙を生じ、遂に河野六

豐通政ミ戦つて利あらず來島に走つたが後ち和睦して剃髮し、湯の町北丘の別荘に入つて龍穩寺ミ號した。これが龍穩の名の濫觴である、が間なく河野家が滅亡して其の香花院たる天德寺、衰へ、加藤嘉明が松山城主なるに及んで其の姻族河口兵右衛門を天德寺に葬り、同時に時の伴職大仙和尚を斥け臨濟宗の蘭叟和尚を方丈に入らしめたので、大仙和尚は已むなく龍穩寺に移つたが其の後嘉明は越山に梵刹を建て天德寺ミ龍穩寺を移した、これが現在の龍穩寺であるそして久松家が松山城主ミなつてからも其の外護をうけ、年々五十石の寺祿を給與されたほごである、河野通宣、通直その他の肖像や名家の書畫記録なきが寶物ミして残つてゐる。十六日櫻は此の寺の境内にある名木である。

十六日櫻

昔此山越の里に吉平ミいふ老人があつた、毎年此の山の櫻花を觀て樂んでゐるたが老病に罹り命日夕に迫つた時その子に向ひ「最早此の世に望みはないが唯一つ今年の櫻花を見ずに死するのが心残りぢや」ミ嘆じたので孝行な悻は父の心を察し、花には早い正月の十五日の夜、櫻樹の下に身を投げ出し一

心こめて祈願したので一夜の中に花が咲き、吉平の病も癒へたミいふので孝行櫻、孝感櫻なき稱し毎年正月十六日には花を開くので十六日櫻ミいふ。

天德寺

同じく山越にある禪宗で龍穩寺ミ同時に加藤嘉明が道後の祝谷から移營したものであるがすつミ以前に遊々ミ推古天皇の御宇聖德太子が勅ミ奉じて伊豫、下り我朝四十六大寺の一ミして創建した古刹で、南朝の興國二年後村上天皇の勅に依り河野彈正大弼通政が多幸山に大徳山彌勒寺の古伽藍を移し、東西十三町、南北六町の寺内ミ三百貫の地を附したのであるが、數度の兵亂に頽廢して衰微に及んだのを嘉明が移營したもので通宜の畫像があるミいふ

來迎寺

道後村西の宮の別當職ミして河野家の創建で寺領二百五十石を有した天臺宗の一寺であつたが文明二年に嚴蓮社應譽良莊和尚が再建し、淨土宗に改め、寛永二年山越西の岡に移轉し延享二年更らに風光の佳なる現在の地に移し、寶曆十年の春本堂を建築したもので現在、本堂は實に百五十餘年を経たもの

であるが木材も大ぶん腐朽したので目下大修繕の計畫中であるといふ。來迎寺は淨土宗總本山知恩院の直末で縣下に於ける最高院とやら、境内には加藤嘉明の寵臣足立重信の墓がある

足立重信

加藤嘉明の重臣で松山城の築城も重信が普請奉行として工事を行つたのであるが、夫れよりも重信の功績の偉大にして後世の民が永く其の恩恵に浴してゐるのは重信川の根本的大改修である、文祿四年加藤嘉明が松前の城主として伊豫に轉封された時、重信も主に従ふて松前に移つたのであるが、重信川の水害の甚しいのを見て其の上流高井の里から垣生村まで約二里の間を變更開鑿して害を除き、更らに石手川を改修して重信川に合流せしめ、八千町歩三十万石の米田を拓はしたのであつて、其の功により大正八年十一月贈正五位の恩命に浴したのである。重信は松山築城の工將に成らんとする寛永二年十一月十七日病を以て逝いたが、其の遺骸は重信の遺言によつて來迎寺の後丘、形勝の地に葬り現に立派な五輪の塔が建つてゐる。地方の有志は重信の功績を表彰すべく足立彰功會を組織し、彰功碑や靈屋の建設を計畫をしてゐる

千秋寺

同じく山越に在る黄檗宗の寺院である。貞享三年松山の城主松平隠岐守定直が按老和尚の高徳に歸依し、四民をして正道に歸せしむべく發願して千秋古刹を復興して祈願所となし、松山五ヶ寺の別格で地方寺院の布令頭としたもので、貞享三年に工を起し文祿三年に全部の完成を告げ、輪奐の美松山に過ぎたりと稱せられたものであるが廢藩置縣後は藩廳の保護を失ふて衰微し、今や僅に佛殿と麻尼殿と山門と廻廊の一部を残すのみとなつたが、地方有志の發起で保勝會が組織され目下再興の計畫中である

大法寺

松山市魚町五丁目の日蓮宗大法寺は大法寺川に沿ふた大きな寺院で、此處に吉田藏澤の墓がある。藏澤は松山の藩士で行政上の手腕に秀で、ゐたが、夫れよりも書畫に巧みで、特に竹の繪に至つては當時藏澤の右に出るものなく、今も尙藏澤の竹こいへば大に珍重がられてゐる。其の藏澤は此の寺の墓地に靜かに眠つてゐるのである。

龍泰寺

同じく山越にある曹洞宗總特派の寺院で創建の年代等は詳かならねど、天保元年中興の住

職石天和尙が再建したものである、石天和尙は二十世の龍泰寺住職であつたこゝから推して古刹であるこゝが知られる。本堂に安置せる五百羅漢は有名である。

道後の名物と土産物

温泉場の商家は主として湯治客を目的に業を営んでゐるので、何處の温泉場でも土産物の名物がある。道後も又その通り道後名物の土産物が、温泉場を圍繞して軒を並べた商家の店を飾つてゐる、殊に道後には名物が多い。

名物に美味しいもの無しといふけれども、湯ざらし團子や湯桁飴や道後煎餅や五色素麺など喰ふて美味しいのみならず、土産物として製造されてあるので日もちもよく、遠方への贈物として途中で腐敗したり、味が變つたりする心配もない。湯ざらし芟は其の名の如く温泉で晒らしたもので、特にき、めが多いといふので土

産として喜ばれる。

温泉染めの手拭や湯の花や竹巻陶器や二六焼、江山焼、寄木細工、竹細工などは地方の名産で、土産物として皆適當であるが、近ごろ新らしい名物として賣り出されたテイレギ味噌は、道後土産として特に面白い味である。

テイレギ味噌

伊豫節の松山名物名所づくしの中に「高井の里のテイレギや紫井戸の片眼鮒」
といふ一節があるが、その高井の里のテイレギで作つたのが此のテイレギ味噌である。テイレギは松山の東南一里あまりの温泉郡久米村大字高井四國靈場四十八番の札所西林寺附近の杖の淵といふ清流に産するもので特種の辛辣な風味を有し刺身のつまとして珍重がられてゐるが、此のテイレギは一種の殺菌力を有してゐて我國でも極めて稀な植物である。そのテイレギを利用し山澤食料品店で賣出したのがテイレギ味噌で滋養にも富み風味もあるといふので喜ばれてゐる。

伊豫節名所巡り

松山を中心とした地方の名所名物を数へ上げた歌に伊豫節がある。木曾に木曾節あり、博多に博多節あり出雲に出雲節ある如く、伊豫に伊豫節のあるのは當然である。

いよの松山、名物名所、三津の朝市、道後の湯、音に名高き五色素麵、十六日の初櫻、吉田さし桃、小杜若、高井の里のていれぎや、紫井戸の片眼鮒、墨薄齋や緋の蕪、ちよいと伊豫餅。

こ歌はれてある名物名所のうち、伊豫餅や五色素麵なきの名物は別として、名所だけを一應めぐつて見ることにする。

道後の温泉や十六日櫻や、五色素メンは既に紹介したところで明かであるから、ここには重複を避けて省くことにして、その餘のものについて大略の説明を加へておかう。

吉田のさし桃 温泉郡生石村の吉田にあつたものなさうだが、今は其の名を残すのみで桃はない。一説には吉田佐島や……さいふので佐島を歌つたのだといふけれど、實際は矢張りさし桃で佐島ではないらしい。

小かきつばた 矢張り温泉郡越前郡の郡境に聳へ立つ高繩山の山つづき難波村の腰折山に産するもので

たけ一尺に足らぬ小さい杜若で植物學上から云つても珍奇なものであるさうな。

ていれぎ はテイレキ味噌の説明に悉くしたから茲には省く。

紫井戸 温泉郡御幸村大字山越の新宅町にある古井戸で、その井戸の水が紫色に見へるさういふので此の名がある、その附近の小池に片眼の鮒がゐたさうだが今は其の名を残すのみである。

薄墨櫻 道後の祝谷から峠一つ越へた温泉郡伊臺村の西法寺に薄墨色の花をつける有名な櫻の老樹がある昔は勅使の立ちし寺さやらで薄墨櫻の名も繪旨によつて名つけられたのださういふ。

緋の蕪 温泉郡雄群村を中心として其の附近に産す紫色の蕪で、これを淺漬として輪切りにきり酢をか

道後の温泉

けるこ肉の中まや真赤に染まつて味もよい、緋の蕪漬は松山名物の一つ。

伊豫緋 松山、温泉、伊豫の一市二郡に於て製造せられるもので正藍染の木綿緋であるが農生用の常用着として歓迎せられ一ヶ年二百五十万反内外の生産ある地方随一の國産。

三津の朝市

伊豫節の名所づくしにイの一番に擧げられた三津の朝市は、關西でも有名な魚市場で、元和二年に創立したものであるが、従来組合經營であつたのを明治十三年に株式組織に改め、現在は十五万圓の三津魚市株式會社として經營し毎期三割五分の配當をしてゐる。三津濱港の棧橋を上がるこ直く其處に、圓形の蛇の目形に作られた珍しい建築物……それが魚市場で、近海での漁獲物は大部分、ここに集まつて來て、早朝から市を立てるのであつて、松山附近の生魚商は何れも二番汽車で買出しに出かける。従つて朝市の賑はしさは一通りでない。

道後の温泉附録

道後町勢概要

道後温泉の所有者である道後湯之町は、昨年度後村を合併して大道後を形造つたので、温泉を生命とする湯之町を農業を主たる生業とする道後村との二つに分けることが出来る左に全道後の町勢の概要を紹介する

面積

四百八十五町八反であつて、これを細別するに次のやうになる。

區	田	畑	宅地	池	沼	山林	原野	雜種地	合計
道後村	一四四、〇三五	三九〇、三三三	一六、九三三	一七、〇〇〇	一六、七四、八〇二	二、四二九	一、八七、二七	四、七七、六七	
湯之町	一	三五、七六	六〇、〇〇〇	八〇	五、〇七	一	一、八、〇〇	一一〇、三三	

泉温の後道

戸數と人口 總戸數は一千四十三戸であつて此の人口五十三百十六人を數へるが、この戸數を職業別に見ると商工業者と農業者とが略ぼ半分々々になつてゐる。從來湯之町は面積が狭くてシカモ土地に比較し戸數が多かつたので、道後村に向つて膨脹する一方、空に向つても又大に膨脹して三層四層の高い建築物が温泉場を一圍繞してゐるのである。

財政

湯之町は財政が豊かで町民の負擔が他町村に比し大に軽いと云はれてゐる。が併し夫れは決して温泉といふ天恵があるために、その温泉の收入によつて町の財政が豊かでないふのでなく、温泉は全々特別會計として一般財政と別にしてある。けれども温泉地であるこのために湯之町は花柳界が盛んなので、藝妓税その他の特別な收入が多いから、自然財政も豊かなのである。試みに大正十三年年度の歳入歳出豫算の概要をあけて見るに左の通りである。

大正十三年度湯之町豫算

算豫町之湯度年三十

一金六萬二千三百三十三圓	歳入總豫算高	一金三萬七千七百五十四圓	歳出經常部豫算
内		内	
金一千二百三十一圓	財産收入	金一萬一千五百九十四圓	役場費
金七百二十四圓	使用料及手数料	金三百二十七圓	會議費
金三千六百九十一圓	國庫下渡金	金五百圓	土木費
金四百九十五圓	雜收入	金一萬七千五百十八圓	小學校費
金二千一十一圓	交付金	金四百三十八圓	補習學校費
金二百圓	繰越金	金八百十四圓	隔離病舎費
金三萬五千五百四十圓	町税	金八百十圓	傳染病豫防費
金二百九十七圓	町積立金	金二千八百三十八圓	警備費
金六十二圓	寄附金	金六十圓	勸業費
金一萬五千七百五十二圓	積立金繰入金	金五十圓	救助費
金二千三百三十圓	繰入金	金千五百七十圓	基本財産造成費

泉温の後道

金三十七圓	諸稅負擔
金二百六十五圓	雜支
金三百六十一圓	交付金
金七十二圓	神社費
金五百圓	豫備費
一金二萬四千五百七十九圓	歲出臨時部豫算高
內	
金九百八十四圓	補助費
金二千二百四十六圓	寄附金
金五千二百九十七圓	積立金
金一萬七千五百七十二圓	土木費
一金七萬五千五百七十三圓	歲入總豫算高

◇十二年度温泉場豫算

金六萬六千圓	營造物使用料
金三千八百二十九圓	雜收入
金五千六百圓	繰越金
金百四十四圓	寄附金
一金七萬八千三百圓	歲出經常部豫算
內	
金五萬三千二百五十二圓	温泉場費
金五十圓	雜支出
金二百二十圓	公園費
金百九十圓	動物園費
金五十圓	新温泉費
金百二十九圓	娛樂場費

町制機關

道後湯之町の町制機關は左の通りで、道後村合併のため町會議員の改選期まで協議員といふ町會議員に準ずる委員を設け、舊道後村の代表者としてある。

金三百十圓	警備費	金五十圓	貴賓會補助費
金百二十二圓	寄宿舎費	金二千三百三十圓	雜支出
金一萬五千圓	町債償還費	金七百二十圓	公園點燈寄附金
金一千五百圓	豫備費	金一千二百圓	温泉場臨時修積立金
一金四千七百七十圓	歲出臨時部豫算	合計七萬五千五百七十三圓	歲出總豫算高
內			
金五百圓	温泉場修繕費		

町制機關

▲町役場	町長	古茂田 謙	助役	古茂田市之丞	收入役	村瀬 秀雄	
書記	白石 節雄	同	五百木松五郎	同	官原 富徳	同	平松保次郎
同	橋本金次郎	同	山本 只保	同	戒田祐五郎	同	小田源一郎

- ▲建築事務所 技師 平 源右衛門 技手 富永 常吉
- ▲町會議員 鮎田 恒一 辻田 清一 富山 喜平 和田類三郎 川崎啓十郎
- 奥村 敬孝 水田松太郎 梅木勘三郎 東 爲九郎 三浦 哲也 川村 荒吉
- ▲協議員 野本 稔 淺井隣三郎 松本榮次郎 西山 刻薫 岡山金太郎
- ▲宮内保之進 松本源三郎 岡崎宗太郎
- ▲温泉浴室増設委員 町會議員全部 協議員全部 公民中ヨリ六名 森田 利作 大野 秀一
- ▲温泉常設委員 榎垣敬次郎 古茂田文平 岩田 貞助 白石 晋吉
- ▲學務委員 辻田 清一 奥村 敬孝 松本源五郎 野本 稔 和田多三郎
- ▲小學校職員 校長 菅 正一 高木 秀雄 高村 文子 近藤コハル
- 五十崎勝一 相原 茂 長井 盛明 岡本 貞吉 兒玉 安友 田中 カウ

各 種 團 體

- 梶原源太郎 洲之内義勝 星野 清 岡田コマツ 伊藤 巖 辻田 盛雄
- 高藤 正宣
- 道後湯之町に於ける各種團體の首腦者は左の通りである。
- ▲在郷軍人分會 分會長 森 知之 副分會長 和田多三郎
- ▲消防組 組頭 渡部荒太郎 小頭 古茂田 潔 全 二神忠三郎 全 越智 利吉
- 全 藤田 久吉 全 川村重太郎 全 古茂田常一 全 森市太郎 全 井手野銀藏
- 全 川久保嘉太郎 全 吉野 元一 全 松島米次郎 全 岩田 森一 全 戒田義男
- 全 山本伊三五郎 全 野本 一義 全 松本 稔 全 野本 數一 全 野本貞義
- 消防醫 八束 武利
- ▲道後青年會 會長 古茂田 讓 副會長 古茂田市之丞 全 菅 正一
- ▲道後婦人會 會長 富田喜美子 副會長 三好 初代

▲道後體育會

會長 古茂田 潔

副會長 蜂須賀修八

同 島崎隆太郎

道後温泉分析表

道後温泉の分拆試験は明治二十九年以來、しばしば各衛生試験所に依頼して行ひ其の成績や醫治効用が表
示されてゐるが、左の最近の分拆試験の成績を紹介しておく。

道後温泉「ラヂウムエマナチオン」定量成績

道後温泉は道後湯之町に在りて二箇の湧出口を有し共同浴制にして七箇所の石造浴槽に分たる泉質は微弱
硫化アルカリ泉にして溫度攝氏四十六乃至四十七度を有し本邦中古來より有名なる温泉の一に數へらる其
試験成績左の如し

温泉名泉質	温泉(攝氏)		色相	一リール中ノ「ラヂウムエマナチオン」含量	測定時日
	泉温	氣温			
神ノ湯 温泉 微弱 硫化アルカリ泉	四七	三三	無色透明ナル モ暫時ニシテ 少シク蛋白石 濁チ生ス	四、二六	大正二年八月廿四日 ヨリ廿五日午前ニ至
瓦 斯	一	三三	無色透明ナル モ暫時ニシテ 少シク蛋白石 濁チ生ス	二、五〇	同 二十五日
養生湯 温泉 微弱 硫化アルカリ泉	四六	三三	無色透明ナル モ暫時ニシテ 少シク蛋白石 濁チ生ス	一、八五	同 二十五日
瓦 斯	一	三三	無色透明ナル モ暫時ニシテ 少シク蛋白石 濁チ生ス	三、三三	同 二十六日

備考 測定に供せし温泉及瓦斯の量は一乃至二「リール」にして就中瓦斯は浴槽石床の間隙より泡出する
ものなるが故に泡出を容易ならしむるため泉量を約三分の一に減し不機能性の水と交換せしめて採
集せり測定方法は「フォンタクトスコープ」を利用し循環法によりて「エマナチオン」の定性及定量を
施行せり

大正二年九月十五日

内務省礦泉事務囑託
陸軍三等藥劑生藥學博士

近藤平三郎

道後温泉試験成績表

第三二三號及第三二四號
一 鑛泉 自第一號至第二號 貳種

放射能作の檢定

シユミット式放射能測定器(分散器圓筒形電氣容量六、三センチメートル高さ二〇、八センチメートル直徑七、八センチメートル内容約一千立方センチメートル)を用ひ振盪法及環氣法に従ひ泉源に於て臨地試験を施行せしに其成績左の如し

鑛泉放射能作

湧出瓦斯ノ放射能作

番號	泉名	放射能作(マツヘ單位)	試驗施行時日
第一號	神ノ湯	三、九八	大正二年七月十日
第二號	養生湯	四、四二	同 十六日

番號	泉名	放射能作(マツヘ單位)	試驗施行時日
第一號	神ノ湯	一三、三八	大正二年七月十五日

醫治的證明書

以上鑛泉貳種及湧出瓦斯一種の放射能作は「ラヂウム、エマナチオン」に基因するものなり
大正二年八月二十一日

高 齋 大務 所長 衛生試驗所技師 藥學博士 山平 山 木部 崎 弘 治

道後温泉は單純亞爾加里泉として古き歴史を有し其効驗の著明なること既に世人の知る處なり加るに最近の試験に據り「ラヂウム」の存在を認むるに至り更に本鑛泉の益有力なる効驗を保證するを得べく乃ち其適症を列擧すれば左の如し

- 一 消化器病 (慢性胃加答兒 胃擴張 胃弛緩 消化不良 神經士 一呼吸器病 (慢性氣管枝加答兒 喘息
- 一 運動器病 (關節強直 腸加答兒 慢性盲腸炎 便秘 痔疾 一肺氣腫 慢性肋膜炎 喘急
- 一 新陳代謝病 (糖尿症 尿崩症 脂肪過多 痛風線病 狗傷病 皮膚病 (慢性濕疹 乾癬 疥癬 癩疹

一 泌尿器病 (慢性腎臓炎、慢性膀胱加答兒、慢性尿道加答兒、慢性膀胱遺尿、遺尿、遺精、慢性子宮病、腺病、慢性卵巢病、慢性子宮附屬器病、白帶、慢性攝護腺病、慢性喇叭管病、慢性子宮病、慢性子宮附屬器病、白帶)
 下 産後衰弱、陰萎、慢性睪丸炎、慢性攝護腺病

醫學博士 德鐸 緒方 正清
 伊豫國道後温泉事務所

右 證明す
 大正二年六月十二日

伊豫鐵道高濱線古町驛列車發着時間表

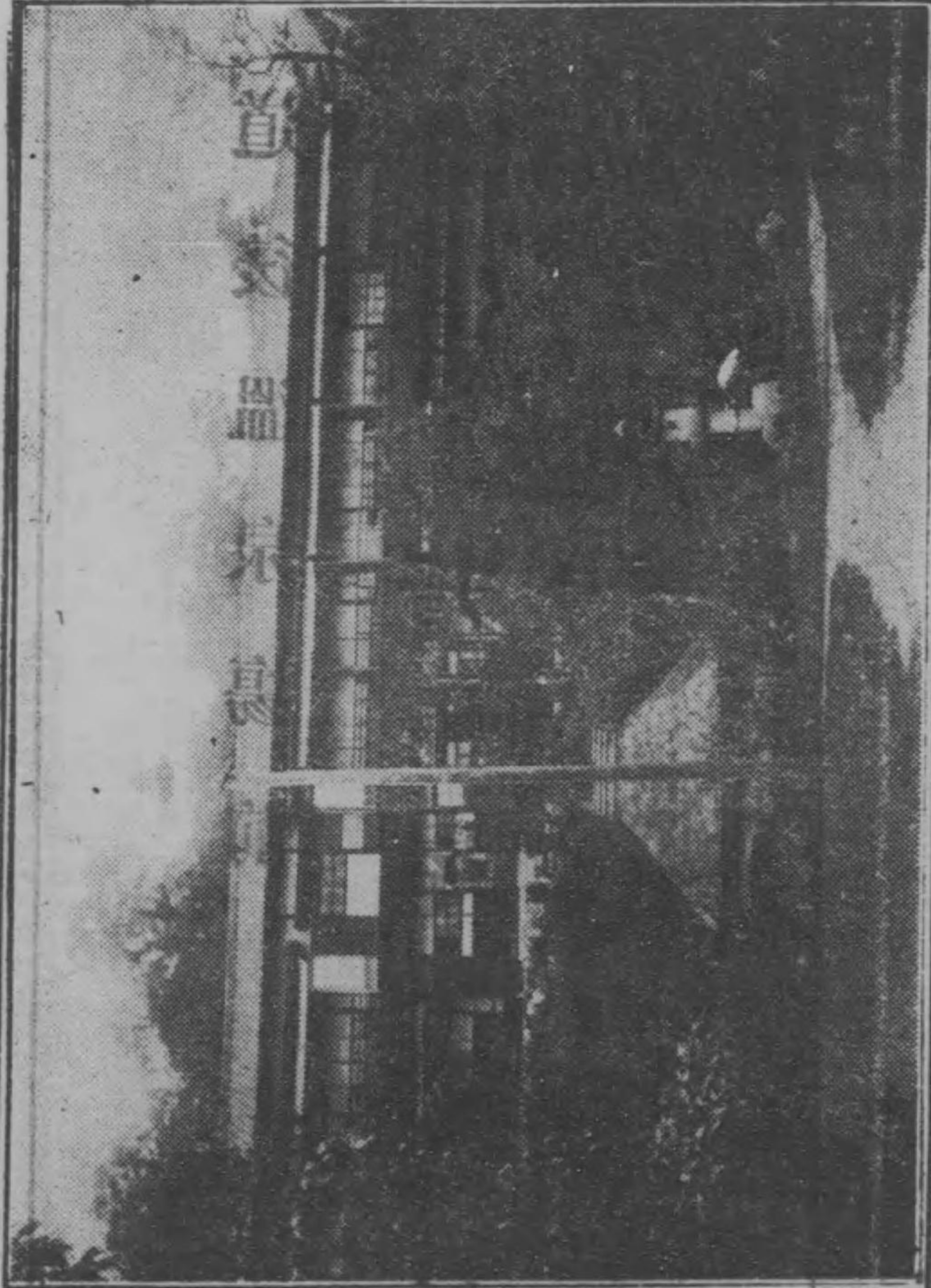
道後から古町驛までは電車で三十分毎に古町驛で上りミ下の兩列車に連絡する。

高濱行	午前 ●五、〇八	午後 二、〇八	二、三六	松山行	午前 六、二〇	午後 二、一〇	六、一〇	六、四〇
-----	----------	---------	------	-----	---------	---------	------	------

▲五、三六	六、〇八	六、三六	七、〇八	七、三六	八、〇八	八、三六	九、〇八	九、三六	一〇、〇八	一〇、三六
午後										
四、三六	四、〇八	三、三六	三、〇八	二、三六	二、〇八	一、三六	一、〇八	七、三六	七、〇八	六、三六
六、〇八	六、三六	七、〇八	七、三六	八、〇八	八、三六	九、〇八	九、三六	一〇、〇八	一〇、三六	一一、〇八
▲六、四〇	七、一〇	七、四〇	八、一〇	八、四〇	九、一〇	九、四〇	一〇、一〇	一〇、四〇	一一、一〇	一一、四〇
三、四〇	一、一〇	一、四〇	二、一〇	二、四〇	三、一〇	三、四〇	四、一〇	四、四〇	五、一〇	五、四〇
七、一〇	七、四〇	八、一〇	八、四〇	九、一〇	九、四〇	一〇、一〇	一〇、四〇	一一、一〇	一一、四〇	一二、一〇
表中●印は十月一日より四月一日まで▲印は十一月一日より三月一日まで運轉せず										

旅館

前泉風後道
鮎屋本店
電話三三四番



旅館

溪鳥後道
鮎屋別館
電話一四〇番

▲五、三六
▲六、〇八
▲六、三六
▲六、〇八
▲六、三六
▲八、〇八
▲八、三六
▲六、〇八
▲六、三六
▲一〇、〇八
▲一〇、三六

半
對

三、〇六
三、三六
一、〇六
一、三六
二、〇六
二、三六
三、〇六
三、三六
四、〇六
四、三六

大正十三年六月二十日印刷
大正十三年六月廿五日發行

(定價廿五錢)

▲編輯人兼

松山市府中町二丁目
久保正

▲印刷者

松山市木屋町二丁目
森田團三郎

▲發行所

松山市府中町二丁目
愛媛タイムズ社

▲六、〇八

▲六、〇八

▲六、〇八

▲一〇、〇八
▲一〇、三六
▲一〇、〇八
▲一〇、三六
▲八、〇八
▲八、三六
▲六、〇八
▲六、三六
▲一〇、〇八
▲一〇、三六

道後温泉場前

岩井屋旅館

電話四六一番

道後松枝ケ町

開

進

樓

内外肥料商

三津濱須先町

三津商業株式会社

日鯉の製造元

電話二六番
電話ミツワ(三〇)



御 料 理

松山市豊坂町
電話二一五番

泰西電氣科 齋元
日 高野 療院
高野 景行
内 松山市北東町一五〇

道後松ヶ枝町
電話二二六番
業 縮 友葉會 樓

活版印刷所

森田三秀齋

松山市本陣町二丁目

道後松ヶ枝町

業 梅 木對樓

電話四七三番

道後溫泉場前

旅館 大和屋支店

電話四五六番甲

道後溫泉前

村兵旅館

電話四五六番乙



於各博覽會
共進會名譽
金銀牌受領

國產砥部燒
竹巻陶器製造元

道後湯之町

加藤正夫商店

道後溫泉場前正六番

道後木テ

電話三五四番



相變らず御ヒイキに

大正樓

利

若

道後松ケ枝町

大正樓

電話一八番甲

道後温泉靈の湯前

旅館

川吉

電話八〇三番甲

道後温泉前

辻田物産店

電話八三七番甲

道後湯之町

合名 仲田銀行道後支店

電話五四九番

道後靈之湯南角東三軒

森八重垣旅館

電話四七四番(甲)

道後驛前

和洋御料理

美ごり

道後松ヶ枝町

大

紋樓

電話 四六九番

道後松ヶ枝町

大

岩樓

電話 五二六番

和洋御料理

道後公園北詰

琴松館

電話 八二三番

金牌受領

湯の花羊羹
練煎餅
白鷺煎餅

道後松ヶ枝町入口

相原振鷺堂

おいしくて日持の良

道後名産

玉まんぢう
櫻羊羹
カステラ

調進所

道後公園北入口
有家
一泉堂

到る處の皆様に力強いお賞めの御言葉を頂いて居ります

各種土產物商

島

屋

道後温泉場西湯前

電話八三八番(甲)
振替大阪五〇二〇七番

道後湯之町

美術彫刻

和田集英堂

和洋酒。罐詰。漬物。突出し

道後湯之町

山澤勇次郎商店

電話五五八番乙
振替大阪三四五六番

道後湯之町

藝妓同業組合花友舎檢番

道後公園内

和洋御料理

望月樓

電話六三八番

靈仙洞傳法道場ハ高嶺ヨリ東南五丁、海拔三百尺、巖子山中ノ一大奇巖窟ニ在リ。洞内第一ノ室ハ二十餘疊敷、第二ノ室ハ六疊敷、第三ノ室ハ十餘間ニシテ、二ノ室ヨリ内陣ハ深水五尺ニシテ四季水涸々トシテ湧出セリ。洞外ニハ靈水行場前殿參籠事務所ヲ建設シ、道場ヨリ頂上弘法大師ノ遺跡澤現堂ヲ拜シ、右ニ松山城ヲ眼下ニ中環ノ平野ヲ、左ニ大島小島ノ浮ム一帯ノ海ヲ望ミツ、太山寺ニ詣スル新道モ信徒ニヨリ開通セリ。

藏王大權現

不動明王 御眞言

のうまくさんまんだばさらなんせんた
まかろしやなそわたやうんたらたかまん

參詣祈念日

毎月(舊)三日、十三日、二十三日

大祭

毎年正月、五月、九月
大峰人各行者大修法荒行

靈仙洞傳法道場

伊豫國高濱

諸病治療、生兒命名、姓名鑑定
祈禱行法加持、各件豫言
乳ノ少ナキ者モ澤山出ル様ニナル
讀經祈禱行法加持 免狀下附

法相宗大本山藥師寺
觀師部管領事務支局

松山名産

薄墨羊羹

松山市湊町三丁目

中野本店

御料理

松山市二番町

梅の家

電話三七番

漬物、洋酒、罐詰、食料品。

山澤食料品店

松山市港町魚之棚

電話四三七番

和御料理

松山市三番町

明治樓

電話二二五番

正

藍

吉

製

造

販

賣

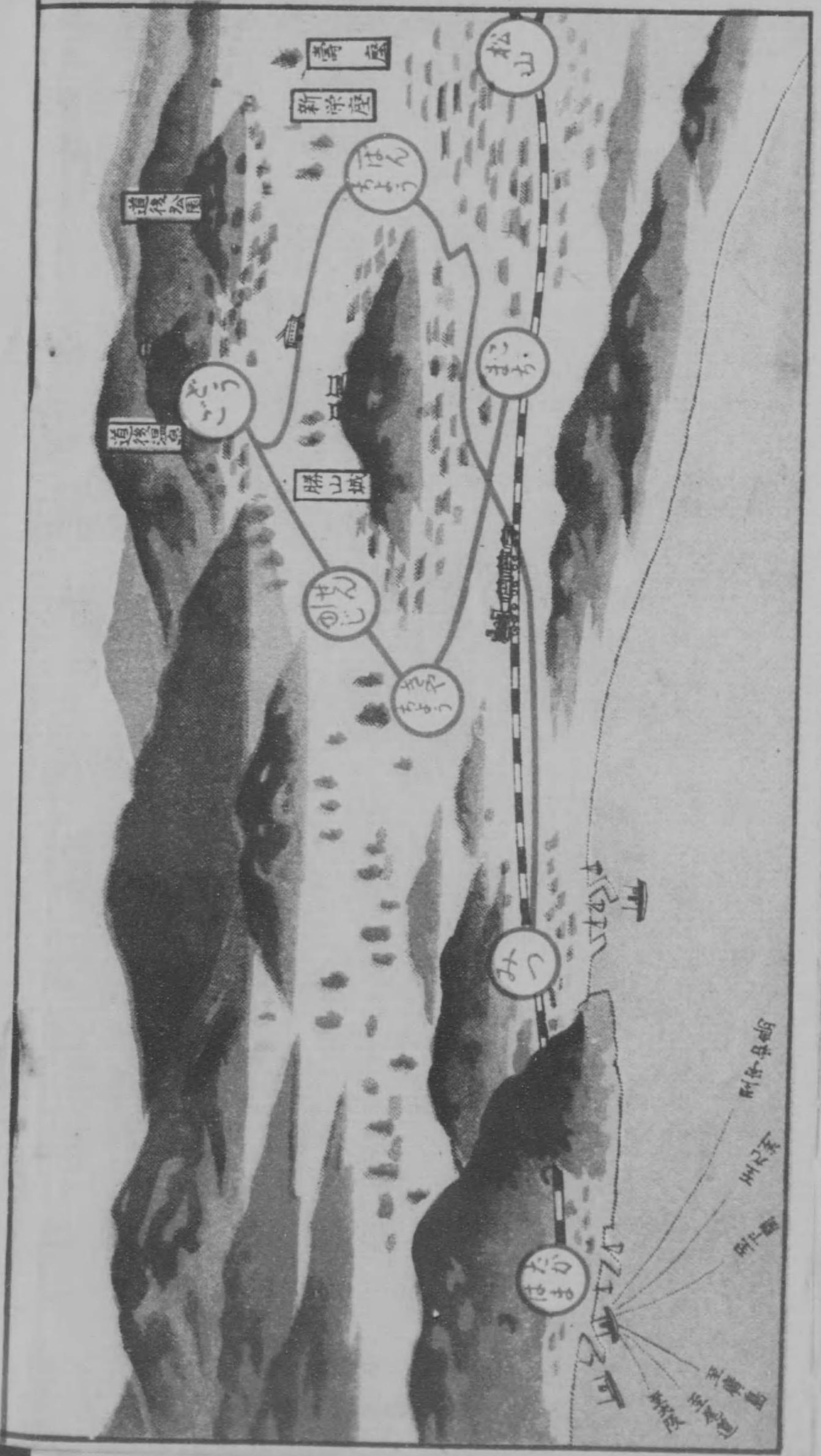
伊豫緋

染

松山市湊町壹丁目

小崎機織所

電話六四三番





終

